

五味川純平『自由との契約』

試論——物語の設定とポストコロニアルの視座

高橋啓太

五味川純平『自由との契約』試論——物語の設定とポストコロナリアルの視座

高橋 啓 太

はじめに

五味川純平の『自由との契約』は、『人間の条件』（全六部、三一書房、一九五六―一九五八）がベストセラーとなった余波がまだ続いていた一九五八年一月に、『人間の条件』と同じく三一書房から全六部作として刊行が開始された書き下ろし長編である（第六部は一九六〇年一月刊行）。『自由との契約』は、五味川の戦後の大連での動向を描いている。五味川は、一九四五年八月一三日に満洲国国境付近で始まったソ連軍との戦闘を生き延び、武装解除後に連行されたソ連軍の捕虜収容所を脱走して一九四五年一月に、妻子のいる鞍山に辿り着いた。鞍山は中国共産党軍の占領下にあり、帰還した五味川は日本人居留民の民主化を目指して奔走していた。この時期の動向は、『歴史の実験』（『中央公論』一九五九・一―四）で描かれている⁽²⁾。その後、一九四六年二月に中国国民党軍が鞍山に迫ったため、五味川は生まれ故郷で両親のいる大連に戻った。『自由との契約』は『歴史の実験』より前に刊行されているが、物

語で描かれているのは、大連に戻った後から内地へ引揚げる時期である。なお、作中では大連は「C市」と表記されている。

『自由との契約』第一部は、主人公の千石研介が米軍から取り調べを受ける場面から始まる。研介は他の日本人数人とともにC市から内地への密航を企てるが失敗し、逮捕されたのである。これが五味川自身の体験でもあったことは、後年の対談やエッセイで語っていることから明らかである。その後、研介は米軍から釈放されるが、再びC市に戻ろうとするところを逮捕されて物語は終わる。しかし、第一部後半から第五部にかけては、大連にいた研介が密航を決意するまでの経緯が大部分を占めている。研介が釈放されるのは第一部終盤であるが、物語現在時のその後の展開は、断続的に挿入される形となっている。全六部の構成はやや複雑である。

近年、成田龍一や五十嵐惠邦は引揚げの観点から五味川を論じているが、両者ともに考察対象としているのは『人間の条件』である。『自由との契約』は引揚げと直接関わる物語であるに

もかわらず、成田は全く触れておらず、五十嵐も「主人公千石研介は、満州との結びつきに深く執着しながらも日本に帰り着く。もう一度内戦下の中国に戻ろうとするが、結局外部の力によってその結びつきは断ち切られてしまう」と言及しているに過ぎない⁽⁵⁾。『人間の條件』を除く五味川作品に関しては先行研究がほぼ見当たらず、『自由との契約』も例外ではない。先行研究といえるのは、坂本梧桐が小説投稿サイト「小説家になるう」(<https://syosetu.com/>)に掲載した「自由との契約」⁽⁶⁾だけである。坂本は、五味川の大連での活動や密航体験が活かされていることを確認したうえで、「歴史の流れと作者自身の体験にしっかりと立脚し、現実と切り結ぶ緊張感を持つて堅固に構築された物語は、容易に覆し得ない重量感を持つ」と評している。「自由との契約」の長大な物語の時系列を整理し再評価しようとする坂本の姿勢には共感を覚えるが、見過ごせないのは、五味川の体験や「堅固に構築された物語」を対象化した批評的な読解が行われていないことである。今日読み直すことで見えてくる問題点も見据えたうえでなければ、『自由との契約』を再評価することはできないのではないかと。

そこで本稿では、研介の人物造形や大連での活動、密航について、五味川自身の体験と照応する作業を行う。坂本がとりあげている部分にも言及することになるが、坂本論では参照されていない文献も用いることで、より詳細な説明を行いたい。そして、再評価のための足掛かりとして、ポストコロナアルの視

座からの作品分析を試みる。

1 千石家の設定

『人間の條件』と同様、『自由との契約』にも五味川自身の体験が活かされているが、いくつかの重要な脚色がなされている。本節では、主人公の千石研介の設定を確認していきたい。

まず、千石家の人物についてである。研介の父一平は「日露戦役」の終りごろに渡満した、草分けの一人で、文字通り裸一貫から巨万の富を作り上げた人物であり、「この町の長者番附をこしらえらるとしたら、人々は千石商事を十指のうちに数えることを忘れなかつたにちがいない」と説明されるほどの財閥である（第一部27）。五味川の回想によれば、五味川の父も日露戦争直後に満洲に渡っている。陸軍用達の商人として成功し、一九一八年のシベリア出兵の頃には「満洲内に幾つか支店を持ち、ウラジオストクにまで手を伸ばしていたそうである」が、この出兵が失敗に終わると同時に没落し、「支店も出張所も次々に閉じた」⁽⁷⁾。

父はシベリア撤兵を契機に家運が傾いて、あせつたらしい。子供心に刻み込まれた母の愚痴など思い返すと、父は挽回を図って株に手を出し、その蹟きが決定的となつて、家は貧困のどん底に落ち込んだ。だから、私の幼いころの記憶は、女中たちにかしずかれていた贅沢な部分と、米の

一升買いにもこと欠いた暗い部分が混り合っている。成長するにつれて、後者の部分だけになった。⁸⁾

五味川が生まれたのは一九一六年で、日本陸軍のシベリアからの撤兵は一九二二年六月のことである。裕福であった栗田家（五味川の本名は栗田茂）が没落していく時期が、ちょうど五味川の幼少期にあたっている。一方、『自由との契約』の千石家は一平の死後（死亡時期は不明）、長男の達也が後を継ぎ、事業をさらに発展させた。その達也が応召したために、「北満の街」の支店を任されていた次男の研介が本店の経営を担うことになる。敗戦後、C市がソ連軍の占領下に置かれると、研介は「店と在庫品のほとんど全部を、父の一平の代に茶汲み小僧として雇われてから叩き上げて来た宗」という中国人に譲った」（第一部27）。

以上の比較から、研介の父である千石一平が日露戦争終結時に大連に渡り、商売に成功したという設定には、陸軍用達として成功した五味川の父の経歴が踏まえられているが、千石家が敗戦時まで有名な財閥として大連に君臨していたという設定は、『自由との契約』独自のものであることがわかる。

また、研介に兄がいるという設定も創作である。正確に述べると、五味川には兄がおり、「内地の伯母が、子がなくて、満洲まで二男の私を貰いに来た」のだが、「丈夫だった私の兄が若くして死んで、私を他家へやれなくなつた」という。管見の

限り、五味川が兄の存在に言及している著作はほかには見当たらず、五味川との年齢差や死亡した時期も不明である。

達也は応召後、外地に出征したまま行方不明となっていたが、アメリカ軍の捕虜となって送還されていた。その後、闇屋として成功して成金となっている。非合法的に引揚げた研介と達也の妻朋子は、収容先で達也の来訪を受ける（第一部17）。達也は、研介と朋子は男女の関係になっていると思っており（研介と朋子はのちに肉関係となるが、そのことが描かれるのは第六部16である）、自分は東京で女と暮らしているにもかかわらず、朋子と離婚しようとはしない。その後も、手紙で離婚してほしいという意思を伝えた朋子を顧みずに、「研介が持つて来た財産を全部朋子にくれてやって、俺も研介も朋子と切れる」⁹⁾「研介が財産を全部取る。その代りに、朋子とは完全に切れないければならん」「お前が漂流してまで運んで来たものを、そっくり俺に寄越せば、朋子は売ってやる」という三つの選択肢を研介に突きつけている（第六部13）。

このように、達也は横暴な人物として造形されているが、研介に対して「お前たちがあの御殿のような家で絹の蒲団にくるまっていた時分に、俺は野戦の泥水の中で寝ていた」と戦地の苛酷さを語る場面もある。研介は、敗戦前後に大連にいなかった達也には「外地にいた日本人に、どんな形で戦争の皺寄せが来たか」はわからないであろうと反論する（第二部10）。兄は兵士として戦場を体験し、弟は満洲・関東州の植民者としての

地位を失ったという戦中戦後の経験の相違が浮き彫りになる場面ではあるが、これ以上の応酬はない。達也は軍隊経験・戦場体験によって「外地にいた日本人」と対峙する存在になることはなく、あくまでも、被占領下でうまく立ち回り、儲けることに至上価値を置く人物として造形されている。ただし、そうした人物造形によって、「満州二世」として引揚げ後も内地に根を下ろせず、やがて大陸に戻ろうとする研介とは対照的な人物となっている。

2 研介の無国籍性

前節で述べたように、研介と兄嫁の朋子は引揚げ後に肉體関係を結ぶことになるが、敗戦後のC市において、研介には白系ロシア人のヴェラ・カチャーエフという恋人がいた。白系ロシア人とはロシア革命によって誕生したソ連共産党政権に同調せず、国籍を失ったロシア人のことで、北滿を中心に満洲にも多くの白系ロシア人が亡命していた。^⑩ヴェラの父レオニード・カチャーエフは旧体制派の白軍将校であったために亡命し、ヴェラと第二子のミチカと三人で大連に住んでいる。研介とヴェラは幼友達で、戦後、ヴェラが電車内で中国人に絡まれた研介を助けたことで再会し（第一部22）、恋愛関係となる。五味川自身や関係者から、白系ロシア人女性の存在が語られたことはない。そもそも、五味川は鞍山に妻子があったが離婚し、大連に行った後に沢田安枝と結婚している。^⑪

作品の発表時期は異なるが、敗戦直後の上海を舞台にした武田泰淳『審判』（『批評』一九四七・四）や堀田善衛『祖国喪失』（文藝春秋、一九五二）でも、白系ロシア人は言及ないしは表象される。「審判」では、日本の敗戦による喪失感を味わう杉が「ユダヤ人や白系ロシア人、祖国なしで上海の街に住みついている人種の身の上が、しきりとわが身とひきくらべられた」と語り、『祖国喪失』でも「ナチスに追われたユダヤ人や、かつてソヴェットに追われた白系ロシア人など」と言及され、さらに白系ロシア人の登場人物として、シベリアから中国各地を移動したというイワーノヴナとその子のズレイカとリョーシャの姉弟が登場する。『自由との契約』のヴェラも無国籍性を体現する存在として登場するが、無国籍であることの自由を享受するだけの存在ではない。

千石は幼友達のヴェラ・カチャーエフと愛し合った。少なくとも、二人は、そう信じていた。はつきりそういう関係に入ったのは、終戦直後の混乱の中でだが、それだけに二人が求め合った度合は深かったと云ってよい。二人は設計を持つとうとした。幾度語り合ったかしれなかった。結果はどうか？ 千石は、いま、海の上にいる。日本人は、まだ国際的には無国籍であった。日本国はまだ承認されていないのだ。白系ロシア人は、ソ連国籍を獲得するだけの努力をするか、あるいは裏切者として清算されるか、いずれ

かを選ばなければならなかった。千石はヴェラにどちらを選ばせればよかったのか。

引用したのは、研介がヴェラには告げずに密航船で出港した後の述懐（第一部11）である。研介とヴェラは、「無国籍」である者同士で生きていくという道を選択しなかった。ヴェラは途中で研介の子供を妊娠するのだが、「ただその子の母親を、彼女が亡命者の娘であり、したがって無国籍であるから、ことのほか、愛したのだ。情欲の一致も、確かにそのことに困っている。他には何も頼るところがないという理由で、二人は互いそこから出発することを許したのだ」（第三部21）と振り返り、子どもが産まれても生活できる保障がないことを悟った研介はヴェラを墮胎させる。

ヴェラとの関係はその後も続くが、研介が本土への密航を試みるきっかけとなったのは、メーデー前日のことである。ヴェラの自宅に向かう途中、研介はソ連軍兵士たちと踊り、「花模様のスカートをはくがえして、独楽のように回っては、きまり、またリズムに乗って回っては、びたりときまって見せている」ヴェラの姿を目撃し、「熱気のような昂奮に巻き込まれながら、それとは全く反対に、絶望的に滅入りはじめた」（第五部22）。翌日のメーデーでは、「ブラスバンドがインターナショナルを吹奏しはじめると、中国人側から地鳴りのするような合唱が起こり、それは直ぐに各民族に伝わって、各国語の歌声が濛々と

黄塵を捲きしてどよめくような空間となっており、「小さな赤旗を持って、その中にいた」ヴェラは、「きつかけさえあれば、いまにも昨日の踊りを踊り出しかねないほど生氣が溢れていた」（第五部23）。それに対し、研介はメーデーの空間に充溢する高揚感を素直に享受できないのである。結局、研介はヴェラには告げずに密航する。その後、ヴェラは物語に登場することはないが、尹の代理人とともに大連に積荷を運ぶ仕事を請け負い、戻ってきた志摩の口から、ヴェラがソ連での職を志願して祖国に戻ったことがわかる（第六部26）。

ヴェラはソ連の国籍を取得する道を選んだわけであるが、研介が密航船で引揚げようとするのは国籍の問題ではなかった。研介は、日本人消費組合の志摩を相手に「ここは俺の家だよ。生れた瞬間からそうだった。そこへ、あとから誰かが来て、ここはお前の家ではないと云った。調べてみたら、おやじが人から奪った家だとわかった。仕方がないからあけ渡すが、すみませんでした、私を軒の端にでも寝かせて下さいとペコペコできるかね?」、また「俺は、自分の意志と手段で出て行くよ。仁礼さんやあんたの帳簿に、本日集荷何千名、乗船何千名、乗船何千名、出港何千名と書かれるような出て行き方はしない。満洲は俺を生んだんだ。日本は三十年を失っても、俺の三十年はゼロではない。満洲はゼロではない」と気持ちを高ぶらせながら話す（第五部29）。研介にとって、故郷は内地ではなく満洲であった。研介が「自分の意志と手段で出て行くよ」と言った

のは、彼の引揚げが本来的な意味での引揚げではなく（異郷への引揚げ）とでもいうべきもので、故郷からの出立を外部から強制されずに行いたかつたからである。

そのような研介の自由への志向が『自由との契約』というタイトルの由来であり、主題であることは明らかである。だが、研介の志向は満洲生まれであるという要因だけで醸成されたわけではない。戦後のC市で、中国人・朝鮮人・日本人それぞれの組織との関係に振り回されたことも要因である。本稿では主題を確認するだけではなく、主題を相対化して別の角度から読み直していくが、その前に、研介の活動とも大きく関係する大連の日本人組織と作中に登場する人物のモデルについて確認しておきたい。

3 日本人労働組合をめぐる設定

『自由との契約』の語り手は概ね研介に焦点化しているが、他の登場人物に焦点化する箇所や、研介が知り得ない情報や出来事を説明する箇所も少なからず見受けられる。つまり、全知の語り手による語りである。この語り手によって、「赤軍進駐後のC市の日本人の動き」が「二つの流派」にまとめられている。その三つとは、「退役将官や、流れ込んで来た所謂大陸ゴロなど」が「資産家たち」の庇護の下で組織した「同胞互助会」、「風雲に乗ずることの好きな、また、巧みな野心家たちや、みずから志士気取りになることを好む活動家たち」が作った「居留民会」、

「各会社や官庁などに働いていた比較的若い知識分子のうちの行動的な人々が、民主主義者の団体を結成しようとした運動」である。これらの中で「赤軍」が最終的に認めたのは、「ほとんど無名人ばかりで構成されている民主主義者グループ」であり、「在留日本人の唯一の公的機関として、日本人労働組合の設立を許可した」（第一部24）。

語り手による以上の説明は、敗戦直後の大連の状況にほぼそのまま当てはまる。大連でも「州内第二世青年が中心となり」結成された「日本人青年奉仕団」、「終戦後の時局收拾を目的として、市会議員を中心として編成された」 「時局対策委員会」、「混乱の緩和・難民の救済・失業者の職業斡旋・ソ連軍に対する諸奉仕作業」のために発足された「日本人奉仕団」など複数の日本人組織があったが、⁽¹⁾「赤軍」が唯一の日本人団体として認めたのは、大連日本人労働組合（以下、労働組合）であった。労働組合は委員長を土岐強、経理部長を石堂清倫として、一九四六年一月二〇日に成立した。労働組合という名称であるが、「生活物資の確保、これに要する資金の獲得」のために、「実質は全日本人の団体としての使命を持たざるを得なかった」⁽²⁾。労働組合の傘下には大連日本人勤労者消費組合（以下、消費組合）も結成された。

『自由との契約』の中で、労働組合関係者として登場する主要な人物は志摩と仁礼である。この二人には、それぞれモデルがある⁽³⁾。志摩のモデルは、五味川の東京外国語大学の友人

で、消費組合の幹部として五味川と再会した高橋庄五郎である。森戸陸子は高橋の半生を追った著作の中で、『自由との契約』（二二書房）で、高橋をモデルに、「志摩」の名前でたびたび登場させて書いている」と指摘している。また、高橋は大連の日本人居留民二十三万人の引揚げ事業に尽力し、一九四九年九月に正規の引揚げ船で引揚げるが、『自由との契約』の志摩は研介や朋子らとともに密航するという違いもある。仁礼に関しては、消費組合の責任者であるという設定から、高橋とともに大連の引揚げ事業に最後まで携わった石堂清倫であると断定できる。石堂自身は仁礼のモデルが自分であるとは語っていないが、木村英亮も「石堂氏は仁礼の名でモデルとなっている」と指摘している。⁽²⁰⁾

志摩や仁礼とは違い、労働組合関係者でありながら悪役として登場するのが、剣持第四郎という人物である。剣持にもモデルとなった人物がいることは、『五味川純平著作集』第六卷（二二書房、一九八四・九）の「解説」を執筆した石堂が剣持のモデルとなった人物について、「K」と記して説明していることから明らかである。このことは、前述の坂本論でも言及されているのだが、坂本もKの名前までは書いていない。石堂の解説に戻ると、消費組合は「はげしいイレブレーション（ママ）の進行下で原価主義をとったため、たちまち基金の二倍くらいの赤字をこしらえ」、Kが石堂に「消費組合の経営たて直しをやってくれ」との依頼をしに来たという。⁽²¹⁾石堂は名前を伏せ

ているが、先述の森戸は「初代執行部の、誤った無料配給の方法を指導した土肥駒次郎（左翼運動家）が自ら、石堂に組合の建て直しを要請してきたのである。組合の欠損をまるまる石堂に背負わせ、責任を取らせようとする土肥の魂胆は見え見えだった」⁽²²⁾（括弧内原文、以下同様）と述べている。この説明から、剣持のモデルが土肥駒次郎であり、石堂が土肥から「消費組合の経営たて直し」を依頼されたということがわかる。『自由との契約』の第二部23からの次の引用は、石堂・森戸が書いていることとほぼ同内容である。

仁礼が閑職にあつて沈黙を守っていた僅かの中に、生産部を預つていた剣持の腹心の男が、経営の上で馬脚を現わした。掻き集めた資金で食糧を購入したのだが、商法の原則を無視して購入食糧を分配したために、忽ち資金に大穴をあけたのである。カンパニヤによる資金の獲得も稼ぎのうちと弁えていたらしいのだ。「中略」食糧と資金は急速に涸渇してきた。／組合の背後にあつて黒幕をもつて任じている剣持は、その難局を仁礼に背負わせようとしたのである。

剣持は「青年時代に「四・二六」に連坐して、二年ほど獄中生活をしていたという経歴の持主」で、戦後は「中国人の新しい指導者たちに接近し」、労働組合の要職には就かず「背後

から操る黒幕的存在に自分自身を仕立て、「組合の重要ポストには、操縦自在のおとなしい男を置くか、腹心の同志を配置した」と説明されている(第一部25)。土肥の経歴に関して不明な点が多いが、戦前に日本共産党の非合法活動を経験し、その後、大連で土肥商會を経営していたという。⁽²³⁾

五味川が土肥の名前を挙げている文章は管見の限り見当たらないが、「燃えていた日々——亡き妻への鎮魂歌——」(『オーラル読物』一九八三・二)の中で、「旅大地区日本人共産主義者同盟」(正確な呼称であるか否か、私も自信がない)の最高実力者をもって任じていたDという男⁽²⁴⁾が、「日本内地と大連との間に密航ルートを拓け、という話」を持ち掛けてきたと述べている。五味川はこのDの依頼によって密航を試みたということであるが、前節で確認したように、『自由との契約』の研介は「自分の意志と手段で出て行く」と決意している。密航する理由には大きな脚色が施されているわけである。

4 民族の「主体性」

「はじめに」で述べたように、五味川は鞍山に帰還後、一九四六年に大連に移動する。五味川の大連での活動は、中共系組織と関わるものであった。

日本の敗戦から間もなく、中国本土から旧満洲へかけて、中国軍の内戦がはじまっていた。蒋介石の中央軍と、共産

党紅軍(満洲では林彪率いる東北民主連軍)との内戦である。東北民主連軍の中に朝鮮人部隊の独立第四師というのがあって、その経済工作部隊の一部が大連に出て来っていた。／＼簡単に書けば、私はそこに入って、朝鮮人民連合会と日本人勤労者組合との接点となって、共に窮迫している二つの団体が協同できる点は協同して些かでも利益をもたらそうと、甘い考えで、だが真剣になっていた。⁽²⁵⁾

中国の他の地域と同じく、満洲国が崩壊した戦後の中国東北部でも国共内戦が再び始まった。引用で五味川が述べているように、東北民主連軍は中国東北部における中共系の軍隊で、のちに中国人民解放軍に組み入れられることになる。李海燕⁽²⁶⁾によれば、「朝鮮人部隊の独立第四師」は、「朝鮮解放以前から闘争してきた朴正徳と崔容測」が一九四五年一〇月に組織した「李紅光支隊」を元にしており、のちに「数千名の朝鮮人青年」が入隊したという。⁽²⁷⁾

C市で知らぬ者はいないと言われる千石商事の息子で、戦争にも行かなかつたという研介の設定は、鞍山から身一つで大連に戻ってきた五味川と異なっているが、千石商事を宗に譲った研介は、五味川と同様の活動を始めることになる。研介はある日、東北民主連軍朝鮮人部隊の「経済工作隊」に所属している李応万という朝鮮人から、合作社を立ち上げ、共同で商売を行うことを提案される。研介は提案を受け入れ、「李が経理で宗

が副經理」となり、研介は売買の実務を担当することになる（第二部12）。その後、研介は白禄寿という朝鮮人商人の訪問を受ける。白は「南朝鮮」を起点に密航貿易を行っている人物で、大連の日本人居留民が持っているネクタイを、衣料品が欠乏している朝鮮で売りたいという話を持ち掛ける（第二部16）。この話に乗った研介は、「日本人の組合の支部組織を動かして、一般日本人から商品として耐え得る衣料品を蒐荷する」ネクタイを集めるために「組合」を訪ねる（第二部22）。作中では、労働組合と消費組合の区別がなく「組合」としか説明がないため、どちらを指しているのかがわかりにくい。が、「組合」を訪ねた研介に應對したのが志摩と仁礼である。

志摩と仁礼は、研介の依頼を承諾する。研介は、消費組合の協力を得て集めたネクタイを白に渡すが、白は「売掛金」を持ち逃げされ、研介に何の連絡もせずに大連に戻る（第二部28）。業を煮やした研介は、朝鮮人民主連合会の事務所まで白と話す機会を持ち、李が「コムニスとの名譽にかけて、この問題を解決しますよ」と請け合うことになる（第二部30）。

このエピソードは、五味川自身の経験を基にしている。晩年の回想によると、「大連在住の日本人から不用のネクタイを組合の組織力で集めてもらって、朝鮮人の商人二人が南朝鮮に運び、利益を持って帰って、その商人と、朝鮮人民主連合会と、日本人勤労者組合とで分配する計画を立て」たが、ネクタイを運んだ商人二人は帰ってこない。後日、二人を見つけた五味川

は「連合会の広い部屋」で、「十四、五人の朝鮮人連合会員に囲まれて対決した」⁽²⁸⁾。二人は「売れたと言いい、売れたが金を支払ってもらえなかったと言いい、売れなくて市場で投げ売りをした言いい、いうことがいちいち変わった」。結局、李応万のモデルであろう「張」という美青年の中尉が「連合会の有り金全部と、トラック一台に山盛りの塩鯖を、日本人組合に運び込むことで円滑な終りを告げた」⁽²⁹⁾。

しかし、この商売上のトラブルを通して、五味川、そして研介の民族観が浮き彫りになる。五味川は李恢成との対談の中で、朝鮮人民主連合会とのトラブルに触れている。事務所での直談判を「敗戦国民の日本人が、朝鮮人に三十六年間の苦痛と圧政を強いた日本人が、いまこうして、朝鮮人に威張って詰問するようなことを許せるか、と、変な方向へ動き出した」⁽³⁰⁾と振り返り、さらに日本の加害責任にまで踏み込み、次のように述べている。

相手は解放を勝ちとりつつある人々であり、わたしは敗れた側、侵略民族のなれの果てです。つまり、いままでの関係が倒立して出来つつあったわけで、客観的なもの見方が通ることはまずなかった。「後略」／当時わたしは、抑圧民族に属してはいたけれども個人的には加害した覚えはない、加害民族の側に生を受けたのは自分のせいではない、しかし加害民族によって成長させてもらったんだから、

そういう意味での責任はある。加害の歴史に対して精算をしなければならぬから、俺は君たちといっしょにやるんだ、そう単純に思っていたんですね、それがまっすぐに受けてもらえないからカッカする。

五味川は、商売上の過失をめぐる問題に加害者／被害者の構図を持ち込む民主連合会の朝鮮人たちに辟易している。五味川にとっては、「日本人が犯した侵略戦争の誤りということ」を抜きにすれば、朝鮮人であろうと、中国人であろうと、日本人であろうと、それぞれ主体性をもった民族ということで、みな同じ⁽³²⁾はずなのである。しかし、李は「五味川さんは日本人だからそういう発想が出ると思うんです。僕ら在日朝鮮人は、まず日本人として教育され育てられてきて、終戦後まず、日本人であろうとしたことを否定せずには本来の朝鮮人として再出発し、生きていくことができなかった。」と反論する。

五味川の述べる「主体性をもった民族」とは、「民族」よりも「主体性」に重きを置いた表現であろう。つまり、民族間の歴史に左右されずに自律する〈主体〉ということである。五味川は、戦中までの日本人が「抑圧民族」であることを認めると同時に、「個人的には加害した覚えはない」自分自身を〈主体〉と自認することができた。そして、それは中国人でも朝鮮人でも同様であると思っているのだが、自国が日本の植民地となり、「日本人」になることを強制された朝鮮の人々はそうではない。

李自身も、一九三五年に当時日本領だった樺太で生まれ、戦後は北海道に移住した在日朝鮮人である。五味川は、日本と朝鮮の間に横たわるポストコロナアルの問題を見過ごしているのである。

『自由との契約』でも、「相手方は朝鮮語でてんでに早口に喋り合った。千石には二、三の単語が捉えられただけである。「イリベン・サラミ（日本人）」という単語が濫発されているのを聞いていると、気色ばんだ雰囲気と照し合わせてみるに、契約上の商事的な事柄が民族感情の方へすり変えられて行くことに誰も疑念は持っていないようであった」「白という朝鮮人の失敗を、憎い日本人である僕から追及されるもんだから、朝鮮人として腹が立つだけのことだ」といった叙述が見られる（第二部30）。また、研介がヴェラとの別れを決意するきつかけとなったミーデーの場面でも、「あの白祿寿の背信の件では、あれほど非友好的だった朝鮮人が、いまは互に歓呼し合い、声を限り日本人と合唱しているのである」というように、恨み節を交えずにはいられない（第五部23）。五味川＝研介が、「朝鮮人であろうと、中国人であろうと、日本人であろうと、それぞれ主体性をもった民族ということ、みな同じ」という認識を微塵も疑っていないことは明らかである。

5 「大村收容所」とポストコロナアルの問題系

『自由との契約』の中では、内地にいる朝鮮人の置かれた状

況も垣間見える。「はじめに」で確認したように、第一部冒頭は、日本本土への密航を企てた研介に対する米軍の取り調べの場面である。語り手は「昭和二十二年十月下旬のある日のことである。場所は、N県O市郊外にある米軍のカマボコ兵舎の一室であった」と説明しているのだが、「N県O市」はおそらく長崎県大村市であろう。というのも、五味川は自身の収容先について、「大村収容所は、窓硝子がなく、有刺鉄線を張ってあるだけで、近隣諸国（台湾、朝鮮）の人々を主に収容していた」と述べているからである。

しかし、五味川が密航に失敗し、五島列島付近で捕まった一九四七年一〇月には、まだ大村収容所は存在していない。五味川の記述には事実誤認がある。⁽³⁵⁾ 基本的なことを確認しておく、旧植民地や外地からの引揚げ者は函館や舞鶴・佐世保・博多など各地に開設された引揚援護局の収容所に一旦収容されることになっていた。佐世保引揚援護局には、密航者の収容先として第一二号宿舎（通称針尾収容所）があった。『佐世保引揚援護局 局史（上巻）』（佐世保引揚援護局、一九四九）によると、「捕えられたものは仙崎・博多の両局に収容され、一部は送還されるものもあつたが、昭和二十一年七月に至り、密航者の取扱、監視は当時中央にあつては内務省が主管し、地方に於ては警察がこれに当ることになり、当局を最終収容所として送還することに「密航朝鮮人収容所となる」とも記載されている。⁽³⁶⁾ 六月から「密航朝鮮人収容所となる」とも記載されている。こ

の時点で、密航者を収容する役割は同援護局だけが担うことになった。佐世保引揚援護局が一九五〇年五月一日に閉局し、同年一〇月一日、第一二号宿舎は針尾入国者収容所となるが、その役割は二月二八日に開設された大村収容所に引き継がれた。⁽³⁷⁾ つまり、大村収容所が朝鮮半島からの密航者や不法滞在者を強制送還するための施設であったことは事実だが、五味川が密航した時点でその機能を担っていたのは、佐世保引揚援護局の第一二号宿舎だったのである。したがって、五味川は第一二号宿舎に収監されていたと推測される。「自由との契約」の中に佐世保という地名は出てこないが、研介たちが収容された施設は「鉄条網で囲まれた密出入国者の収容所」で、「同じ建物の二階には、朝鮮人の密入国者と密出国者が多勢留置されていた」と説明されている。

研介は収監された「密出入国者の収容所」の中で、重油を売るために朝鮮半島への密航を企て逮捕された尹という男と知り合う（第一部20）。尹は研介の釈放後にも姿を見せるが、今度は趙と名乗る（第二部9）。趙は自分が「尹だったり、趙だったり、西だったりするような、無国籍の三国人」であり、日本は「三国人には、いまのところ自由の天国です。税金はありません。犯罪もMPが来るまでは大丈夫です。食料は自由です。切符なんか、右から左です」と「三国人」の自由を強調する。一方、研介は密航者として八百万円分の荷物を没収され、占領軍のCIC（対敵諜報部）から「Sの一五三番」という番号を

振られる(第六部21)。五味川も「特殊な政治的・経済的工作員であるという誤解」から、「S = 213」と付けられたという。

だが、尹と研介を自由／不自由という線引きで対比するのは表層的な捉え方である。研介は密航を企て、大連で東北民主連軍関係の組織と関わっていたために占領軍から警戒されているが、「日本人」であることは揺るがない。尹はそうではない。占領軍・日本政府は、研介＝五味川が内地に来る五カ月前の一九四七年五月に外国人登録令を公布している。この勅令は、在日朝鮮人を「外国人」とみなして登録・管理するものであった。収容所にいた尹も「外国人」としての登録を受けていない非合法な存在であり、また、収容所には尹以外にも多くの「密出国者」、つまり朝鮮半島に密航しようとした在日朝鮮人も多数収監されていた。福本拓は、外国人登録令が「「密航」取締の延長線上で、在日朝鮮人を確実に管理できる者とそれ以外とに二分し、後者を「例外状態」へと封じ込める機能を有していた⁽³⁹⁾」と指摘している。「例外状態」とはジョルジュ・アガンベンの用語で、法の秩序の外部に放り出された状態のことである。例えば、アガンベンは九・一一同時多発テロ事件後のアメリカのアフガニスタン侵攻で捕虜となった「タリバーンの兵士たち」について、「ジュネーヴ条約にもとづく「捕虜」(POW)についての規定を享受できないだけではなく、アメリカの法律にもとづきたいかなる犯罪容疑者としての取り扱ひも受けることがない。囚人でもなければ被告人でもなく、たんなる拘留者

(Detainees)であるにすぎない彼らは、純然たる事実的支配の対象であり、法律と裁判による管理からまったく引き剥がされているため、期限の点のみならず、その本性に関しても、無期限な拘留の対象なのである」と指摘する。尹を含めた収容所の朝鮮人たちは、「例外状態」に置かれていると言ってよいであろう。

物語の中では、「無国籍の第三国人」として自由な尹と、「日本人」であるが不自由な研介という対比的な関係が前景化していくが、研介は日本政府と占領軍による在日朝鮮人の分断の生々しい現実を目の当たりにしていたのである。千石研介の自由の希求という主題を相対化することで、『自由との契約』をポストコロナアルの文学として読み直すことができる。

おわりに

本稿では、『自由との契約』に描かれた五味川の大連での活動と引揚げ体験が物語の中でどのように脚色されているのかを確認し、最終的には、研介自身は意識していないが、大連と内地の両方で朝鮮人との間で浮き彫りになるポストコロナアルの問題系を明らかにした。もともと、研介は日本の戦争責任を意識していないわけではない。むしろ、他の多くの日本人居留民たちよりもはるかに戦争責任を自覚している。そのことは、住宅調整運動をめぐる場面からも確認できる。

C市では、人口に比して圧倒的に広い居住空間を占有してき

た日本人と、狭い居住空間に押し込められてきた中国人との不均衡を是正するための住宅調整運動が実施される。対応策を考えるために千石家に集まった近隣の居留民からは、「われわれの家を明け渡せと云うんだって、これが相手がアメリカなら、確かに敗けたんだから仕方がないってこともあるが、八路に降伏したわけじゃないですもんな」「組合のバカたれが！ 何十人も雁首を揃えて無駄飯ばかり食いやがって、引揚促進一つ面と向って当局に催促できないたア、なんてざまだ！」と次々に不満の声が拳がる（第三部19）。

語り手は、これより後の箇所では研介の視点を離れ、「日本は中国に敗けはしなかったのだと思ひ込んでいたのである。それにもかかわらず、敗けもしなかった相手から、存分に敗戦国民の憂き目を味わわされると感ずるから、不満なのだ」と居留民たちの中国に対する認識を批評している（第三部25）。さらに、住宅調整が実施され、居留民同士の間で格差が顕在化するようになること、「中国人に対しては彼も隣人と同じく搾取者であったにもかかわらず、いまや、一握の米の所有者を「ブルジョア」と称し、「階級の敵」と視るのである」という「革命の思想と政策を安易に悪用する傾向」が現われてきたことを指摘する（同上）。語り手だけではなく、研介も、千石家での会合に来た青年が「自分たちの力でどうにか平和に暮らすことができるようにするのには、ここでは、中国の人たちと協力する以外に方法はないと思うんです」と言ったことに同意している（第三部19）。

日本の敗戦によっても、中国人に対する「搾取者」であるという自覚のない居留民たちの様子が、批判的に描かれていることがわかる。

しかし、研介は中国東北部にいた日本人が「搾取者」であったと自覚しているにもかかわらず、戦後の朝鮮人がどのような立場に置かれることになったのかという問題に対しては無自覚なのである。李恢成との対談からもわかるように、研介の無自覚さは五味川自身の無自覚さとも重なるものであり、『自由との契約』を戦後日本における対中国意識と対朝鮮意識の違いが刻印された文学作品として捉え直すことができる。

五味川は、ライフワークとなる『戦争と人間』（三一書房、一九六五―一九八二）や『モンハン』（文藝春秋、一九七五）、『ガダルカナル』（文藝春秋、一九八〇）などで、自らの戦争体験を敷衍して満州事変以後の日本の戦争を検証していくが、『自由との契約』以降、戦後の大連・満洲での生活や引揚げ前後の経験を作品化することはなかった。しかし、近年では占領期文学の再検討や朴裕河による「引揚げ文学」の提唱といった動きにより、内地と外地、占領と被占領の諸問題をめぐる研究が盛んになっている。本稿では試論として『自由との契約』の作品分析を行ったのみであるが、近年の研究動向と接続することによって、さらに掘り下げた形での再評価が可能となるはずである。

註

- (1) 『人間の條件』は、第六部刊行直後の『週刊朝日』（一九五八・二・一六）の巻頭で「かくれたベスト・セラー」という特集が組まれたことでベストセラーとなった。拙論「五味川純平『人間の條件』に関する序論的考察」（『花園大学文学部研究紀要』第五二号、二〇二〇・三）参照。
- (2) 『歴史の実験』に関しては、拙論「戦後の鞍山を描く——五味川純平『人間の條件』『歴史の実験』」（『花園大学文学部研究紀要』第五五号、二〇二二・三）を参照。
- (3) 有馬稲子・五味川純平「猫と鯛談」（『プレイハウス』）、五味川純平・数佐三郎「印刷業の後進性に体当たり」（『財界展望』一九六四・一二）、「燃えていた日々——亡き妻への鎮魂歌——」（『オール読物』一九八三・一）など。
- (4) 成田龍一「『戦争経験』の戦後史——語られた体験／証言／記憶」（岩波書店、二〇一〇）、五十嵐恵邦「五味川純平と『人間の条件』」（『敗戦と戦後のあいだで 遅れて帰る者たち』（筑摩選書、二〇二二）。
- (5) 五十嵐、柱（4）前掲論、八三頁。
- (6) 坂本梧桐「五味川純平の文学」（<https://ncodesyosetu.com/h8479gv/>）二〇一三年七月一八日閲覧。
- (7) 「追憶（一）」（『月報1』）、「五味川純平著作集」第二巻、三一書房、一九八三）二―三頁。
- (8) 注（7）前掲論、三三頁。
- (9) 注（7）前掲論、三頁。
- (10) 小泉京美「満洲」の白系ロシア人表象——「桃色」のエミグラントから「満洲の文学」まで——」（『昭和文学研究』第六四集、二〇二二・三）は、一九三〇年代から一九四〇年代にかけての満洲における白系ロシア人表象を検証している。
- (11) このことについては、「ベストセラーの隠れた条件——美千子——は別にある」（『週刊新潮』一九五八・八・一八）の中でゴシップ的に紹介されている。拙論「五味川純平の引揚げ体験——鞍山・大連での動向」（『花園大学文学部研究紀要』第五四号、二〇二二・三）も参照されたい。
- (12) 『武田泰淳全集』第二巻（筑摩書房、一九七一）三頁、「堀田善衛全集1」（筑摩書房、一九九三）六三頁。
- (13) 一九四六年のメーデーに関する述懐ではあるが、石堂清倫は『大連日本人引揚げの記録』（青木書店、一九九七）の中で、「中国人にも初めてであったろうが、日本人にとっても中国や朝鮮の民衆と兄弟のように腕を組んだ初めての経験であり、それだけでも感激にみちた行事であった。働く者が先頭にたったとき、初めて昨日の敵対から今日の友誼へ、民族と民族の団結へと新生活が切りひらかれることを参会者は無言のうちにつかんだのだ」（五五頁）と振り返っている。
- (14) 満蒙同胞援護会編『満蒙終戦史』（河出書房新社、一九

六二) 三五八〜三五九頁。

(15) 注(14) 前掲書、三五九頁。

(16) 坂本は「『自由との契約』論」の中で仁礼のモデルを石堂清倫であると推測しているが、志摩に関しては、五味川の『歴史の実験』が「志摩の前身に当たる人物を主人公にして」書かれ、「志摩も千石と同じく作者の分身としての要素を強く持っている」と指摘している。本稿では後述の森戸陸子や木村英亮の指摘も踏まえ、志摩のモデルは高橋庄五郎であるという立場をとる。

(17) 森戸陸子『大連』引揚げを見届けた男 高橋庄五郎の日中友好50余年(創土社、二〇〇〇) 五〇頁。また、高橋は『五味川純平著作集』第三卷(三二書房、一九八四)

の「月報12」掲載「栗田茂君のこと」の中で、五味川が消費組合に「朝鮮の塩鯖とネクタイの交換」を依頼してきたと回想している。

(18) 森戸、注(17) 前掲書、一〇一〜一〇五頁。

(19) 注(14) 前掲書、三六二頁。

(20) 木村英亮「補注」(石堂、注(13) 前掲書) 二四五頁。

(21) 石堂清倫「解説」(『五味川純平著作集』第六卷、三二書房、一九八四) 四六六頁。

(22) 森戸、注(17) 前掲書、五〇頁。

(23) 飯塚靖は「1960年代北京在住日本人の一人として——山本勝司氏に聞く」(『下関市立大学論集』第六四卷第二号、

二〇二〇・九)の注9で、玖村芳男『長い道』第四卷(東陽書房、一九八八)を参照する形で、土肥が戦前に非法活動を行っていたことや、戦後の大連で日本人共産党組織の要職にあったことを紹介している。筆者は本稿執筆時点で玖村の著書を確認できなかったが、飯塚の紹介する土肥の経歴は剣持とも合致する。

(24) 「燃えていた日々——亡き妻への鎮魂歌——」(『オール读物』一九八三・一) 五五頁。

(25) 注(24) 前掲論、五二頁。

(26) 李海燕「戦後の『満州』と朝鮮人社会——越境・周縁・アイデンティティ——」(御茶の水書房、二〇〇九) 五二頁、参照。

(27) 吉在俊・李尚典『中国国共内戦と朝鮮人部隊の活躍 一九四五年八月〜一九五〇年四月』(李東埼訳、同時代社、二〇一五) 四七頁。

(28) 注(24) 前掲論、五四頁。

(29) 注(24) 前掲論、五五頁。

(30) 李恢成・五味川純平「原野からの出発」(『野性時代』一九七四・二) 一四五頁。

(31) 李・五味川、注(30) 前掲論、一四五頁。

(32) 李・五味川、注(30) 前掲論、一四六頁。

(33) 李・五味川、注(30) 前掲論、一四六頁。

(34) 注(24) 前掲論、五七頁。

- (35) 以降の五味川の事実誤認と大村収容所に関する記述は、拙論「五味川純平の引揚げ体験——鞍山・大連での動向」(『花園大学文学部研究紀要』第五四号、二〇二二・三)と一部重複する内容を含むが、本稿では『自由との契約』の考察のために改めて説明する。
- (36) 『佐世保引揚援護局 局史(上巻)』(佐世保引揚援護局、一九四九)、加藤聖文編『海外引揚関係史料集成(国内篇)』第一〇巻(ゆまに書房、二〇〇二)九二頁及び一一〇頁。
- (37) 大村収容所の歴史と地政学的分析に関しては、挽地康彦「大村収容所の社会史(上)——占領期の出入国管理とポスト植民地主義」(『西日本社会学会年報』第三号、二〇〇五・四)、玄武岩「密航・大村収容所・済州島 大阪と済州島をむすぶ「密航」のネットワーク」(『現代思想』二〇〇七・六)を参照。
- (38) 注(24)前掲論、六〇頁。
- (39) 福本拓「密航」に見る在日朝鮮人のポスト植民地性」(『アジア遊学』二〇一一・九)六一頁。
- (40) ジョルジュ・アガンベン『例外状態』(上村忠男・中村勝巳訳、未來社、二〇〇七)一二頁。
- (41) 大連に実施された住宅調整運動に関しては、注(14)前掲書、二五五～二五六頁、石堂、注(13)前掲書、二七二～二八〇頁、石堂清倫『わが異端の昭和史 上』(平凡社ライブラリー、二〇〇二)三七九～三八三頁を参照。

(42) 「引揚げ文学」は、朴裕河が「植民地・占領地体験とその後の引揚げの体験を素材とした表現の試み」(「おきざりにされた植民地・帝国後体験」、『引揚げ文学論序説』人文書院、二〇一六、二八頁)と定義した概念で、内地中心に構築されてきた「戦後日本」を脱構築し得るものとして再評価の必要性を説いている。

付記

『自由との契約』の引用は『五味川純平著作集』第四～六巻(三一書房、一九八四)に拠った。また、原則として旧字は新字に改め、全ての引用についてルビは省略した。